

イグノーベル賞受賞の土壤には、「互いの違いを認め合う」文化がある

「ノーベル賞」は知っていても、「イグノーベル賞」を知っている人は少ないかも知れません。私も先日まで知りませんでした。

「イグノーベル賞」とは、一言でいうと「人々を笑わせ、そして考えさせる業績」に対して贈られる賞です。「イグノーベル(Ig Nobel)」という名前は、ノーベル賞の創設者であるアルフレッド・ノーベルの姓に否定的な接頭辞「Ig」をつけた造語ですが、それは、ノーベル賞と比較しての自虐的な表現であって、優劣を示しているものではありません。これまでに受賞しているのは興味深く考えさせられる研究ばかりです。

「イグノーベル賞」は、日本人の受賞者が多く、1992年に資生堂の研究チームが「足のにおいの原因物質の特定」という研究で医学賞を初めて受賞しました。そして、2007年以来、日本人はなんと毎年受賞されています。例えば、日本人のチームが開発した「わさび警報器」(2011年化学賞)や「涙の出ない玉ねぎ」(2013年化学賞)は商品化されています。どのようなことを目的に開発されたのか、調べてみると面白いですよ。今年も、右のような微弱な電気が流れる箸などを使って食べ物味の感じ方を変える実験を行った明治大学などの研究チームが「栄養学賞」を受賞しました。これで、日本人の受賞は17年連続です。

「イグノーベル賞」は、日本人とイギリス人が受賞者の常連となっています。その理由として、イグノーベル賞創始者のマーク・エイブラムズ氏は「多くの国では、変わった行動をしている人を蔑視する中、日本とイギリスは誇りにする風潮がある」と述べています。「互いの違いを認め合う」日本にはそんな文化が根付いていると世界的で認知されていることは、誇るべきことであると思います。



減塩食を「しょっぱく」感じる 箸型デバイス

第9回 まなびん から 3年生

3年生では、あまりのあるわり算の文章題を出しました。

えんぴつが26本あります。1人に4本ずつ配ると、何人に分けられて、何本あまりですか。

子どもたちは、「26÷4=6あまり2」と求めていましたが、多くの子どもが、「答え 6あまり2」と書いていました。文章題であるので、答えは、「6人に分けられて2本あまる。」と書かなくてははいけません。子どもたちの中には、「6」や「2」が、それぞれ何を表している数であるのかを理解できていない子どももいました。これでは、計算はできて、理解できていとは言えません。「その式は何をしているのか」、式の意味を考えさせることが必要です。

4年生

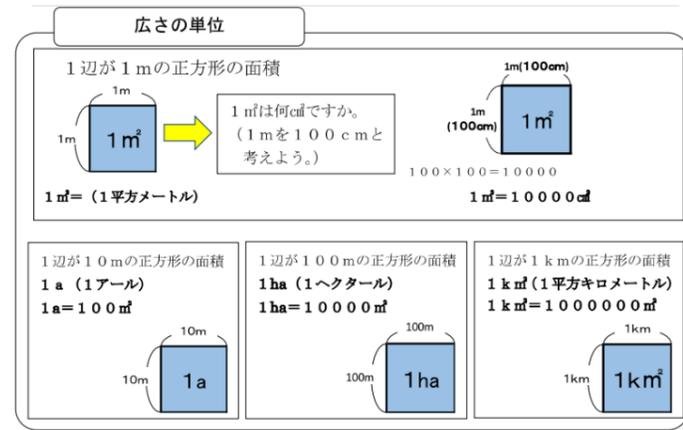
右は、秋山さんが和田さんに何てたずねたのかを答える問題です。この問題の場合、和田さんの答え方をヒントに、何てたずねたのか考える必要があるため、まず、この問題で、何を答えればよいのかが理解できていない子どもが多くいました。少しでも理解できればと、「サッカーをやって、一番うれしいことはなんですか?」「シュートが入ったことが一番うれしいです。」といったやりとりをしたあとも、なかなかぴんときていない様子でした。このやりとりでも、「シュートが入ったことです。」というふうに答える子どもが多くいました。日常会話では、それで十分通じますが、勉強という点では、たずねられたことに、正しく答える習慣を身につけさせる必要があると感じました。

5年生

長さや重さ、面積、体積などを別の単位で表すことを「単位換算」と言います。

単位換算は、子どもたちは大変苦手としています。

右は、面積についてですが、これらの単位換算を全て覚えようする必要はありません。大切なのは、正方形を書いて、その中に、「1a(アール)」といった面積の単位を書いて、それぞれ1辺の長さを書いて、図として「目で覚える」とよいと思います。これさえ分かっているならば、あとはかけ算をして答えを求めるだけです。



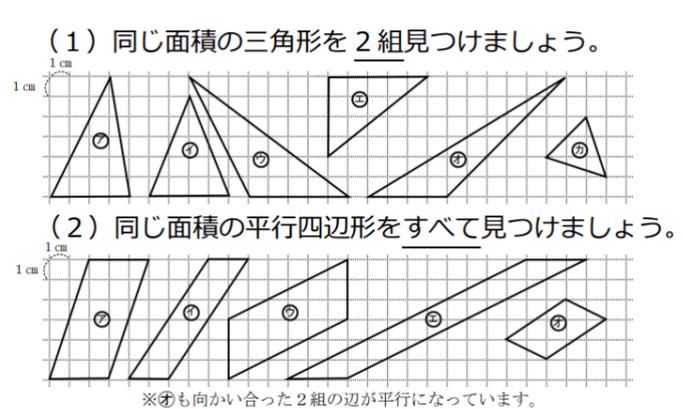
6年生

三角形の面積の求め方を忘れていた子どもがいました。下の公式はしっかり覚えましょう。

$$\text{底辺(の長さ)} \times \text{高さ} \div 2 = \text{三角形の面積}$$

右の同じ面積を求める問題では、形が似ていることに惑わされず、いずれの形も、底辺の長さと高さが同じものを見つけるようにしましょう。

三角形のエや平行四辺形のウのように、いつも底辺が下にあるとは限らないので、図形の問題では、いろんな方向から図形を見る「くせ」をつけましょう。



ノキを育てるのは大変です。しかし、その分、お茶の農家としてやりがいを感じます。お茶の葉のしゅうかく時期は、年に一回ではないのですね。チャノキを育てることに、やりがいを感じているとのことですが、自分がつくったお茶を飲んでくれた人が「おいしい」と言ってくれることが、一番うれしいです。これからもおいしいお茶をつくり続けようという気持ちになります。